キーンコーンカーンコーン…

学校の終わりを告げるチャイムが鳴る。

（帰ったら何しよっかなぁ。）

そんな事を考えながら、帰る準備をしていると、

「帰りのホームルームをするぞ〜。」

と、西原先生が教室に入ってきた。

「え〜…山原嵐！」

「はい！？」

急に名前を呼ばれて、思わず立ち上がってしまった。

「風堂黒道くんという特別な事情があって不登校になっている生徒にこのプリントを届けてほしいんだが、いいかな？

「えー…めんどくさいなぁ…。」

風堂黒道…。何度か学校で会ったことがあるのだが、会話したことはない。部活にも、委員会にも所属していない生徒だ。一ヶ月に数回登校するのだが、いつもすぐに帰ってしまう。中学校の入学式はいたのだが…。

「家、近いだろ？頼んだぞ〜。」

「…はーい。」

（友達と遊ぶ約束をしていたのに…また今度だな…。）

そう思いながら、風堂黒道の家に向かう。たしか、一軒家だったはずだ。

（風堂黒道か…。あまりいい噂は聞かないな…。不安だな。）

静かな夕方の道を、ゆっくりと歩く。すると、中から子供の声が聞こえてきた。

「兄弟でも…いるのかな？」

恐る恐るインターホンを押す。

ピーンポーン…

「健！誰か来たからドア開けてきて〜！」

「はーい。」

少し大人びた声と、大きな足音が聞こえ、ドアが開いた。

「あ…風堂さんの家ってここかい？」

僕がそう聞くと、

「うん。僕、風堂健…。」

兄弟か…？随分と幼いが…。

「えっと…黒道くんいるかな？」

「くろにぃのこと？くろにぃは、買い物に行ってるよ。」

買い物か…。困ったなぁ、早く帰りたいのに…。

「いつ帰ってくるかわかる？」

「ん〜、結構前に行ったから、そろそろ帰ってくると思うけど。」

「帰ってきたら、これ渡しておいてくれる？」

僕はそう言い、先生からもらったプリントを渡した。

「うん、わかった。」

よし、これで帰れるぞ…と思ったが、

「ただいま〜。ん？誰？この人。」

「くろにぃ！おかえり〜。」

急にドアが開き、黒道が帰って来てしまった。

（あれ？思ったより…怖く…ない？）

「あ、これその人に渡されたの。なんかのプリント。」

「お～、学校のプリントを届けに来てくれたのか！ありがとな。まぁ、ちょっと上がってけ？」

ええ…、上がれと言われて帰るわけにはいかず、黒道の家にお邪魔させてもらうことにした。

「お邪魔します…。」

「俺は、四人兄弟でな、その中の長男だ。さっき君と話してたのは、健だ。で、この背が高いのは、陽太。末っ子が、蓮。」

さっきの大人びた声は陽太だったのか…。

「両親は？仕事なの？」

僕がそう聞くと、黒道は顔を曇らせた。

「いや、母親は離婚して、いなくなった。父親は、去年にいなくなったんだ。」

（悪いこと聞いたな…。）

「なんか…ごめん。」

僕が謝ると、黒道は笑って言った。

「いや、いいよ。俺は、ケンカばかりする両親がいなくなって嬉しいくらいだ。」

でも、僕にはその笑い声が、少し無理をしているように聞こえた。やっぱり、寂しいのだろうか…。

「プリント、ありがとな。もう遅いし、帰ったほうがいいだろう。また明日会おう。」

「うん、わかった。また明日。」

黒道に別れを告げ、自分の家に向かう。

（あまり悪い印象はなかったけどな…。）

また明日ということは、学校に来るのだろうか？

「ただいま…って、寒っ！？」

家の中は、冷え切っていた。窓が開けっ放しだったのだろう。カバンをソファに置き、リビングの机の上の置き手紙を見る。

「えっと…『おかえりなさい。冷蔵庫におかずがあるから、温めて食べてね。そして、宿題を終わらせて早く寝なさい。ゲームは十時まで。』…はいはい。」

いつものことだ。帰ってきても、親は仕事でいない。父が死んでから、母は、一生懸命働いている。忙しいのはわかるのだが…。

「おかず…これか。げっ、魚じゃん。」

レンジでおかずを温め、炊飯器からご飯をよそう。

「おいしい…。」

数分でご飯を食べ終わった僕は、食器を洗い、リビングで宿題をしながら、考え事をしていた。

（いつからだろう…僕が一人でいることが多くなったのは…。親とだって、一ヶ月に一度くらいしか会わない。）

「はぁ…。」

小さいため息をつく。もしかして、僕は、寂しいのだろうか…？自分の気持ちもわからないまま、宿題を進める。

「よし…終わった。」

宿題を終わらせた僕は、明日の授業の準備をした。

（明日…本当に黒道は学校に来るのだろうか…？）

また明日…か。また学校で会えるかな？

「国語…数学…よし。ゲームするか…。」

今は、八時半…まだまだ時間はある。

「よし、やるか！！」

ヘッドホンをつけ、ゲームを始める。そして、いつの間にか、時間を忘れてしまっていた僕だった…。

翌朝、起きたときには遅刻寸前だった。

「あ～…やらかした。」

急いで制服に着替え、カバンを持ち、家を出る。

「やべ…急げ。」

「あ…昨日の…。」

黒道だ。ここで出会うなんて、思ってもいなかった。というか、本当に登校するのか…。

「名前、聞いてなかったね。教えてくれない？」

「あ、うん。僕は、山原嵐。嵐でいいよ。」

「嵐…。昨日はありがとな。プリント届けてくれて。」

走りながら会話をするのは思った以上に苦しいものだった。

（改めて見ると、黒道ってすごい大きいんだな…。）

足も速い。一度離れたら追いつけなくなってしまいそうなほどに。

「本読んでたら、寝落ちしちゃって。」

「へぇ…黒道って本読むんだ。僕は、深夜までゲームしてたんだ。そしたら、時間忘れちゃって…。」

母の言いつけを守らなかった僕が悪い…。

「なんの本を読んでるの？」

「色々。小説が好きでね。」

そんなことを話しながら走っていると、学校が見えてきた。

「嵐って俺と同じクラス？」

「うん。同じ二組だよ。」

「学校、一緒に行動してくれない？学校しばらく行ってないから、席とか覚えてないんだ。」

ああ、そうか。しばらく来てないもんな。

「うん、いいよ。」

「おう、嵐！プリント、届けてくれたか？」

西原先生がいきなり話しかけてきてびっくりしてしまった。

「はい、届けました。」

そう言い、教室に向かう。

「俺の席、どこ？」

黒道がそう言うと、うるさかった教室がしんとしてしまった。

「こっちこっち、僕の前だよ。」

僕がそう言うと、黒道はそこに座った。

「ありがと。前来たときと席が違うからわからなくなっちゃって…。」

と、困ったように言う黒道に皆ビビっている。

（そんなに怖いかな…？）

たしかに、体は大きいし、言葉も荒い。でも、人を怖がらせるほどではない。

「ホームルームするぞ〜。あ、風堂、生徒会のプリント読んだか？」

「はい、読みました。あ、今日は、二時です。」

「わかった。」

二時…？　二時に下校するのか？きっと蓮の迎えだろうな…。それで今まで早く帰っていたのか。

「よし、じゃあホームルームするぞ〜。起立！」

ホームルームが始まり、出欠確認と、連絡をして、西原先生は教室から出ていった。

「ねぇ、二時ってさ、蓮の迎え？」

「うん。幼稚園、二時に終わるからさ。」

そう小声で話していたら、クラス委員長である青木が僕を呼んだ。

「おーい、嵐。ちょっと来て。」

「あ、うん。今行くね。ごめん行ってくる。」

黒道にそう言い、青木の席に向かう。

「あいつ、黒道さ。いい噂聞かないぞ。あまり関わらないほうがいいと思う。」

「へぇ…。」

僕は、優しいと思うけどなぁ。

「気をつけろよ。もしかしたら、お前が狙われるかもしれないんだぞ。」

「はいはい…。」

くだらないなぁ。僕は弟思いで、優しい黒道は好きだけどなぁ。

「おかえり。なんの話してたの？」

「ああ、つまらない話。青木が黒道を悪く言ってるだけ。そんなこと、しないでしょ？黒道は。」

そんなこと、するわけがない。弟思いで優しい黒道が。

「じゃあ、もし本当にしていたらどうするの？」

ドキッとした。そして、何も言い返すことができなかった。

「え…？」

「はは、嘘だよ。やるわけ無いじゃん。」

そうだよな。黒道が、そんなつまらないこと、するわけないもんな………。

「ほら、授業。始まっちゃうよ。」

そして、先生が入ってきて、授業が始まった。黒道は二時に帰った。でも、授業の内容なんて、僕の頭に入ってこなかった。結局その日は、授業に集中できずに家に帰った。そして、いつの間にか寝てしまっていた。

ピー…ポーン…ピーンポーン

インターホンの音で目が覚めた僕は、目をこすりながら、ドアを開ける。

「黒…道？」

僕は自分の目を疑った。そこには、黒道が立っていたからだ。

「やぁ。お願いがあるんだけどさ…。」

申し訳無さそうに黒道がそういった。

「…何？」

いつになく僕が冷たくそう言うと、黒道は、

「勉強…教えてくれないかな…？」

と、苦笑交じりの声でそう言った。思わず僕は、吹き出してしまった。

「あはは…黒道って真面目だね。意外だなぁ。」

「なっ…笑うなよ。俺だって高校行きたいし、勉強はできるようになりたいんだよ。」

黒道の意外な一面を見ることができて、僕はどこかすっきりした気分になった。きっと、謎だらけで、詳しく知らなかった黒道のことを、少し知ることができて、安心したのだろう。黒道という存在を知ることができた。それだけで、僕は安心した。

「わかったよ。僕の部屋でいいね？」

「うん、いいよ。」

黒道と一緒に僕の部屋に行った。

「えっと、なにを教えてほしいの？」

黒道は、少し考えてから、

「数学…かな？」

と答えた。確かに数学は難しい。

「わかった。ちょっと待ってて。教科書持ってくるから。」

僕はそう言い、リビングに放っておいたカバンを取りに行った。

（まさか、黒道が僕の家に来るなんて…。）

理由はわからなかった。でも、黒道と話すことができて、嬉しかった。

「ただいま。取ってきたよ。」

「ありがとう。で、数学のここなんだけど。」

それから数十分、喋らずに勉強し続けた。しかし、黒道がその静寂を壊した。

「あの…ごめんな…。学校のこと。」

「あ…。大丈夫。気にしてないから。」

黒道が謝ったが、何故か僕は、嘘をついてしまった。でも、黒道はその嘘を見破った。

「授業中、ずっと上の空だったけど？」

黒道は心配そうな顔でそう言った。

「えっ、僕、上の空だった？」

「うん。ボーッとしてた。先生に名前呼ばれたのに、気づかないで、周りの人に呼ばれて、やっと気づいたくらいだった。」

確かに僕は、授業中、黒道のことを考えていた。でも、まさかそんなに考え込んでいたとは思わなかった。

「だから俺、心配かけたって思っちゃって、謝りに来たんだよ。」

そういうことだったのか。だから、黒道は僕の家に来たのか。

「…大丈夫。ありがとう。」

「よかった…。家に来たとき、電気ついてないから、いないのかと思ったよ。」

黒道は、優しいやつだ。ただ、不器用なだけだったんだ。人付き合いも言葉遣いもちょっと荒いだけだった。それだけで、周囲の人は恐れ、敬遠する。

「さ、もうこんな話やめよう。楽しく勉強でもしようぜ！」

「うん。あ、そこ違うよ。」

僕がさり気なく間違っているところを指摘すると、黒道は、

「ええっ！？三回もやり直ししたのに！？」

と、悔しそうに言う。一応、黒道も勉強について行こうと必死なのだ。

「黒道ってさ、彼女作らないの？」

僕は、そう言って茶化した。

「ばか、彼女を作ろうと思わないし、興味すらないぞ。考えたことないし…。」

黒道は、そうツッコミを入れた。

「モテるんじゃないの？黒道は。背高いし、かっこいいし。」

「ないない。彼女作るのめんどくさいし、そもそも皆俺に近寄らない。俺が女に話しかけたら、それこそ、カツアゲだと思われるじゃないか。」

確かに、悪い印象はないが、見た目は怖い。しかも、言葉遣いが荒いので、怖いのかもしれない。僕はそう思わないが…。

「前はさ、先生がプリント届けてくれてたんだよ。だから、嵐がプリント届けてくれた時、先生じゃないな…って戸惑っちゃって。」

えっ、てことは、先生がめんどくさくなったから僕に頼んだってこと？西原先生ならあり得るかもしれない…。そう考えると最低だなぁ。

「最初は戸惑ったよ。子供の声聞こえるし、うるさかったし。」

「あいつら、また騒いでたのか。俺が家にいない時は、静かにしろって言ったのに…。」

「いや〜…笑ったよ、本当に。健くんが出てきてくれたんだよ。くろにぃ、おかえりって…。」

僕が笑いながら言うと、黒道は、

「ちょっ…その呼び名やめろ！あいつら外でもそう言うから、恥ずかしいんだよ！」

と、顔を赤くしながら言う。

「わかったわかった…。ごめんって…。」

なるほど…黒道はからかうとこんな顔をするのか。

「そういえばさ、体育の山ちゃん元気？」

「あ～、青山先生？バリバリ元気。むしろ、元気すぎて困る。」

「あれ、あいつは？一組の天才。」

「あ…誰だっけ？善ちゃん？まだまだ天才。前のテスト、学年一位だぞ？やばいって。でも、三組の江藤。学年二位。あいつもやばいよね。」

そんなくだらない話をしているうちに、勉強なんて忘れてしまっていた。そして、気づいたら、外は真っ暗になっていた。

「あ、外真っ暗だよ？大丈夫か？」

「大丈夫。あいつら寝かしてから来たから。」

黒道が来たときはまだ外は明るかったが、もう暗くなっている。そんなに話したのだろうか。

「先輩でさ、好きな先輩いる？」

黒道が、そう聞いてきた。

「え？友達としてってこと？」

僕は、そう聞き返した。

「そうそう。ほら、この学校ってさ、優しい先輩いっぱいいるじゃん。」

「うーん…付き合いよくて、頭良くて、優しいって言ったら、伊藤悠希先輩かなぁ？」

伊藤先輩は、近所のコンビニでよく出会う人だ。お菓子やアイスを奢ってくれる、優しい先輩だ。中三で、今は高校受験に向けて、頑張っている。

「あ～、伊藤先輩ね。確かにいい人だよね。」

「だよなぁ。あ、明日学校来れる？」

「あ～無理。明日バイトだから。」

バイト…中学生でバイトしてるのか…？

「どこで？」

僕はそう聞いた。

「そこの角曲がったところにあるコンビニ。」

伊藤先輩がよく行くコンビニか…。今度行ってみるか…と僕が考えていると、

「あ、やべぇ。もう二時じゃん。もう遅いし、帰るわ。あいつらも心配だしな。」

と、黒道が言う。やっぱり、弟思いだなぁ。

「ん、わかった。またな。」

「おう、じゃあな。」

黒道はそう言い、暗い夜道を帰って行った。僕は、その背中をずっと見ていた。僕は、すっきりした。黒道が、悪いことをするやつじゃないと、改めてわかったからだ。安心した。その反面、怖かった。本当は、噂に出ているような悪いことをしているのではないかと、考える自分が心のなかにいたからだ。それが、怖かった。

ブー…ブー…

僕のスマホが震えた。どうやらメールが届いたらしい。

「誰からだ…？」

黒道からだった。僕がカバンを取りに行っている間に、メールアドレスを登録していたのだろう。メールの内容は、

『嵐、また今度。』

という、簡単な内容だったが、僕はずっとそれを見つめていた。そして、返信した。

『うん、また今度。』

それから、スマホの電源を切り、部屋の電気を消した。明るかった部屋は、一瞬で暗くなった。そして、何気なく窓の外を見た。

（星が…よく見える。）

そんな他愛のないことを考えていると、いつの間にか僕は寝てしまっていた。

次の日、僕は早めに学校に行った。理由はない。ただ、なんとなく静かな教室に居たいだけだった。

「………。」

まだ、七時二十分だ。誰もいない静かな空間に僕は居たかった。もともと、クラスの中でも特に目立つことはなく、外で遊ぶ時以外は、一人で本を読むことが多かった。

（今日…暑いな。）

何気なく窓から外を見ると、猫が一匹校庭を散歩していた。そして、上を見上げ、僕をじっと見つめた。

「…何だよ。」

僕が小声でそうつぶやくと、猫はあくびをして、どこかに行ってしまった。

「なぁんだ…。僕が一番かと思ったのに。」

「青木…。」

「なぁ…お前、黒道のこと、どう思う？」

「別に…いいやつだと思うけど…。」

すると、青木は渋い顔をしてこう言った。

「ふーん。そうか。ま、君の好きにしなよ。僕は嫌いだよ、あいつのこと。」

「………。」

どうして、青木はこうも黒道を嫌うのだろう。なにか深い理由でもあるのか、それともただ単に気に入らないのか、僕にはわからなかった。それから、クラスの人が集まり、授業が始まった。いつもの日常だった。しかし、体育の時間に、事件は起きた。

「今日は、サッカーをするぞ〜！」

青山先生がそう言った。すると、皆は、

「よっしゃぁ！！」

と、喜んだ。僕も楽しかった。だが、

「よし、行ける行ける！そのままシュートだ！」

と、青木に言われた僕は、ドリブルで進んだ。いい調子で、もうすぐシュートというところで、

「危ない！」

という声がした。その声を聞いた瞬間、激しい痛みとともに、意識を失ってしまった。

「ん…いってぇ…。」

僕は、目を覚まし、あたりを見渡した。

「………。」

まず視界に入ったのは、窓の外。外は明るかった。

（数時間しか経ってないのか？）

そう思いながら、窓から目を離し、横を見た。

「黒…道？なんで…？」

椅子に座った黒道が、本を片手に寝ていた。

（ここは…どこだ？）

もう一度周りを見渡した。ベージュのカーテンに、人の声…どうやら僕は、病院に居るらしい。誰かが、救急車でも呼んだのか？

「……お、起きたか。足、まだ痛いか？」

「足……。」

そういえば右足が動かない。右足を怪我したようだ。

「まぁ…状況から教えてやるよ。」

黒道は、僕が病院に行くまでのことを教えてくれた。

まず、僕は体育の時間に九条にぶつかり、頭から転んだ。それから、九条が足の上に倒れてきた。すぐに青山先生が救急車を呼び、病院に来たのだが、頭を打ったこともあり、意識が戻るまでしばらく様子を見ることにしたということだった。手術はすでに終わっており、今は治療期間ということらしい。

「僕は…何日寝てたの？」

「三日。三日間、ずっと寝たきりだった。」

黒道は、バイトが終わり、僕の家に来たそうだが、インターホンを押しても反応がなく、心配になったので学校に聞いたところ、病院に行ったと聞き、駆けつけてきたという。

「じゃ、ちょっとジュース買ってくる。何がいい？」

「じゃあ…りんごで。」

黒道がうなずき、病室を出ていくと、青木が入ってきて、こういった。

「あいつに感謝しな。三日間、ずっとお前の隣でお前が目覚めるのを待っていたんだ。僕が変わろうかと聞いても、大丈夫の一点張りでな。」

だから、あんなに眠そうだったのか。

「…嵐、ごめんな。あいつ、悪いやつじゃなかった。僕の友達が、黒道に殴られたって噂聞いてさ、真に受けちゃったんだ。」

「いいよ…わかってくれただけで…。」

すると、いきなりカーテンが開き、誰かが入ってきた。

「九条…。」

「ごめん、嵐…。」

「そろそろ主治医が来る。それまで待っとけ。」

青木が九条の謝罪を遮り、鋭くそう言って、主治医が来るのを待った。

「こんにちは。主治医の鏑木です。」

主治医が病室に入ってきた。僕達は、説明を待った。主治医は、資料を整理して、こう言った。

「外で待っていたお連れ様にはもう説明いたしましたが、嵐様は、右足首の骨折です。頭部に目立った外傷はございませんので、ご安心ください。」

骨折か…。生まれて初めての経験だった。

「どれくらいで治りますか？」

僕は、主治医にそう聞いた。

「大体、二ヶ月から三ヶ月ですね。リハビリも必要です。」

それを聞いて僕は、どうしたらいいかわからなくなってしまった。その後も、主治医は何かを言っていたが、内容は頭に入ってこなかった。

（僕の足…どうなってしまうのだろう…。）

しばらくして、主治医が出ていき、黒道が帰ってきて、こう言った。

「…嵐、痛いか？」

「……うん。」

黒道はそれだけ聞いて椅子に座り黙って本を読み始めた。それから、青木が九条を連れて、病室から出ていった。

「…嵐、来週青山先生が来る。あと、担任の西原先生も。今日、病院から学校に電話するらしいから。それと、九条の親も来る。」

それが何を意味するのか、僕にはわかっていた。

「じゃあ、俺は蓮の迎えに行ってくる。また明日な。バイト先には説明して、許可取ったから、明日も俺来るよ。」

黒道はそう言って帰ってしまった。

「………。」

廊下で、青木が九条に何かを言っているのが、聞こえてきた。

（青木も協力してくれている…。）

学級委員長の青木は、来週の話し合いに参加するだろうか。

「ッ………。」

涙が出る。理由はわからない。ただ、静かに涙が流れ落ちていく。

「夕食です。食べられますか？」

「……はい。」

手で涙を拭い、返事をする。

（他の皆が、僕のために動いてくれている。）

そう思うと、一刻も早く怪我を治したいという気持ちが胸の奥からこみ上げてきた。

「いただきます！」

耐えてやる…。治療だろうが、リハビリだろうが、何だって耐え抜いてやる！

「食べ終わったら呼んでくださいね。」

「はい。」

その後、食べ終わった僕は、皿を下げてもらうと、少し本を読み、寝てしまった。

それから、一週間後の朝、人の声で目が覚めた。

「ふぁ……。」

あくびをして、起きる。周りを見渡すと、誰もおらず、カーテン越しに声が聞こえる。

「お、起きたかおはよう。」

青木が入ってきて、そう言った。

「うん、おはよう。黒道は？」

「そろそろ来る。バイト先の店長と、シフトを確認したいってさ。」

そうか…。すると青木は、カーテンを開けて、

「おい、嵐起きたぞ。先生も、ほら。」

と言った。そして、先生と九条、九条の母親が入ってきた。

「嵐くん、大丈夫かい？痛みは？」

「大丈夫です。そこまで痛くありません。」

僕がそう言うと、九条の母親は、

「大丈夫だって。安心しなさいよ。痛みはないなら、大したことはないでしょう。」

と言った。青木は、なにか言いたそうだったが、先生に止められた。

「九条さん、先程も伝えたとおり、嵐くんは、右足首の骨折です。大丈夫なわけがないでしょう。」

先生は冷たく言った。すると青木が、

「今回の責任は、九条くんにあるので、治療費を払ってもらいます。」

と、怒ったように言った。

「いくら払えばいいんですか？」

九条の母親はそう言った。

「手術代で、三十万円。入院費用は、四十万円、合わせて七十万円になります。学校での怪我ですので、保険が適用されます。」

主治医が説明した。すると、九条の母親は、

「じゃあ、保険込みで払えばいいのね？」

と、言った。先生は、

「そうですね。保険は三割なので、四十九万円になります。」

すると、九条の母親は、渋い顔をして言い返した。

「そんな大金、払えるわけ…。」

「嵐〜。来たぜ〜。」

九条の母親が言い終わらないうちに黒道が来た。シフトの確認が終わったのだろう。

「黒道！来てくれたのか！」

「おう！まだ痛むか？」

黒道は僕にそう聞いた。

「ううん。大丈夫、ちょっとだけ。」

「で、この人が、九条の親か？」

鋭くそう言い、九条の母親を見た。

「うん、九条の母親。」

僕がそう答えると、黒道はため息をつき、

「今、どういう話？」

と、主治医に聞いた。主治医は、金額や治療方針について説明をした。最後に九条の母親の治療費について説明をすると、

「だから、四十九万円なんて無理だって言ってるの。そもそも、わざとじゃないんだし…。」

と、九条の母親が言いだした。すると、黒道はいきなり病室の机を蹴り、こう言った。

「わざとじゃなくても、怪我させたんだし、責任は取ってもらわないとな？」

黒道がそう言うと先生が、

「落ち着け、風堂。今回はあくまでも話し合いだ。」

と、黒道を落ち着かせた。僕は黙っていた。

（確かに、九条はわざとではない。でも、怪我をさせた。僕は、九条に怪我をさせられた。）

僕は、複雑な気持ちだった。そもそも、責任が誰にあるのかわからなかった。周りをよく見ていない僕の不注意でもあるし、僕が居るのに構わず突っ込んで来た九条も悪いが…。

「じゃあさ…。」

僕は、皆が思っていなかった方法を口に出した。

「僕が十九万円負担するから、あとは九条が払ったら？僕の不注意でもあるんだし、ね？」

僕がそう言った時、皆が驚いた顔をした。

「いいのか？嵐。本当にそれで？」

「そうだぜ。お前、そんな金あるのか？」

青木と黒道がそう言ってきたが僕は、

「いいんだ。僕も悪いし、金は、生活費から削ればいいし。」

と、言った。そして、ちらっと先生を見る。

「まぁ、それでいいなら、いいんじゃないか？本人が決めることだし。」

僕の視線に気づいた先生はそう言った。青木はため息を付き、諦めたように言った。

「じゃあ、そういうことで。後日、学校に来て、詳しく話させてもらいます。あ、帰ってもらっていいですよ。」

それを聞いた九条は、

「わかった。」

と、言って帰った。九条の母親は、九条についていくように帰っていった。

「じゃ、僕も帰る。早く治るといいな。」

青木は、先生と一緒に帰っていった。だが、黒道は、帰らなかった。

「ったく…本当に嵐はお人好しだな。」

笑いながら黒道はそう言った。

「あはは…。」

「ま、そんな嵐が、好きなんだが…。」

…は？待て待て。今黒道なんて言った？えっ？なんて言った？と混乱していると、

「あのさ、プリント届けてくれた時あっただろ？その時、俺を怖がらない嵐に興味がでて、色々見てたんだよ。そしたらさ、嵐が優しくて、お人好しなやつだってわかったんだ。あまり目立たない。でも、俺の話まともに聞いてくれたの、嵐だけだったんだ。」

黒道は、下を向きながらそう言った。

「だからさ、好きになったんだ。周りから怖がられて、避けられている俺と関わってくれた。そんな嵐が、好きなんだ。」

「………。」

僕は、返す言葉が見つからなかった。

「男が男を好きなんて気持ち悪くて、変かもしれないけど、俺は嵐が、好きだ。」

「黒道…あの、僕…。」

僕が、小さい声でそう言うと、

「いや、いいよ。俺が嵐を好きなだけだから。いいよ。大丈夫…。」

と、黒道は笑っていった。でも、その笑い声は、いつか親のことを話したあとの無理をしているような笑い声だった。

「じゃあ、俺、帰るわ。家にあいつら残してきたし、またな。」

「待っ……。」

僕は、止めようとしたが、黒道はさっさと出ていってしまった。僕は、寂しかった。そして、怖かった。僕の大切な人が、またいなくなってしまわないか、不安で仕方がなかった。

「………。」

僕は、止めることができなかった。心が傷つき、無理な笑い声を残して、去っていこうとする黒道を。僕に心配をかけないように笑って去っていった黒道を。僕は後悔した。

（ごめんな…黒道。）

黒道は、僕のことを考えてくれていたのに、僕は黒道のことを考える事ができなかった。

ブー…ブー…

スマホが急に鳴り出した。僕は驚きながら画面を見る。

（…電話。黒道からか…。）

「もしもし。」

「あ、嵐さん。」

この声…陽太か…？

｢何…？」

「黒道兄さんそっちにいますか？」

「いないよ？なんで？」

妙な胸騒ぎがした。まさか…。

「家にいないんです。帰ってきてない。」

家にスマホを置いていったのか…？

「どうするの？もうそろそろ十時になるけど…。迷子じゃないの？」

「いや、兄さんは病院までの道を知っているので、迷子ではないと思います。」

じゃあ…黒道は、自分の意志で…？

「とりあえず、蓮と健は寝かせたので、探しに行きます。きっと近くにいると思うので。」

「わかった。心配だから、連絡はしてね。」

僕はそう言って電話を切った。

（黒道…ごめん、本当にごめん。）

僕は、うまく言葉にできなかった。だから、黒道を傷つけてしまった。中途半端な言葉が、黒道を苦しめてしまったんだ。

「黒道…ごめんな。」

ブー…ブー…

電話、陽太からか…？

「もしもし。」

「おう、俺。」

その声にドキッと心臓が跳ねた。黒道の声だった。

「陽太くんは？」

「今、一緒に家に帰ってる。ったく、ゆっくり帰ってたのに、大げさなやつ…。」

よかった…。黒道、見つかったのか…。

「…なぁ、嵐。本当に俺じゃ駄目なのか…？」

黒道が聞いてきた。その声は、僕が今まで聞いた黒道の声の中で、最も弱々しい声だった…。

「…僕は、怖かったんだよ。三年前かな。僕に告白してきた女の子がいたんだ。断らなかったよ。相手の好意を無下にはしたくないからね。でも、その子、交通事故にあって死んじゃったんだ。登校中、僕の目の前で。それから、怖くなった。自分を責めた。大切な人を失いたくないから、僕は…。」

それから、僕が言おうとしていたことを黒道は代わりに言った。

「大切な人を作らなくなった…か？」

「そ。もう嫌だった。大切な人を失いたくない。親は仕事で帰ってこないし、好きな人はいなくなる。自分を呪った。嫌になってしまった。自分が、嫌いになってしまったんだ。」

布団が濡れる。僕は、泣いていた。でも、僕の声は、恐ろしいほどに冷たかった。

「だから…もう…。」

「そんなこと…。」

黒道は、大声で言った。

「知るかっつーの！！」

「…！？」

僕は驚いた。黒道が叫んだからではない。黒道が、涙声だったからだ。

「そんなの知るかよ。俺は、嵐の過去なんてどうでもいい！！俺は、今の山原嵐が好きだって言ってんの！死んだからなんだ。お前のせいか？違うだろ。お前のせいなわけ…ねえだろ、なぁ……嵐。」

泣きながら必死に言葉を重ねる黒道は、小さな子供のようだった。

「黒道…。」

「なぁ…お前が苦労する意味ねぇよ。お前が殺したわけじゃないんだから。嵐が気に病むことないだろ？いいんだよ、自分を許せ。」

黒道は、優しく言った。消灯時間をとっくに過ぎている病室は、暗かった。でも、今はその暗闇が心地良い…。

「僕、いいのかな。幸せになっても、いいのかなぁ？黒道、僕…怖いよ…。」

僕は、大切な人を作っても、いいのだろうか？そんな思いを、黒道は一言で吹き飛ばしてくれた。

「ああ、いいんだよ。嵐。」

心が楽になったようだった。まるで、自分で自分につけた枷が外れたようだった。

「黒道…ありがとう。おやすみ…。」

「うん。明日、会おう。」

そう言い、電話を切る。静かな病室にすすり泣きの声が響く。

（ああ、そうか…。僕が怖かったのは…。）

僕が気づいた。自分の本当に怖かったものに。

（僕は、自分が怖かったのか…。）

人を疑う自分。病院に居るだけで、黒道を探しに行けなかった自分。嘘で固められて身動きができなかった自分の体が、息を吹き返す。心の闇が晴れる。黒道に救われた…。

「…ありがとな。」

小声でそう言い、僕は眠りについた。

「嵐…ねえ、嵐。」

ここは…？確か、僕は寝ていたはず…。

「見て！この貝殻。きれいでしょ？嵐にあげるよ。」

美月ちゃん…？ここは…海？

「みっちゃん…？」

「どうしたの？ボーッとして。眠いの？」

嘘だ…。みっちゃんは…死んだはず…。僕の目の前で、血を流して…。

「ごめん、考え事をしていた。」

考えてもいない言葉が口から出た。

「もう、変だなぁ。せっかく海に来たのに、楽しもうよ嵐。」

どこか懐かしい…このやり取り。

「あ、あそこ焼きそば売ってるよ。買ってこようか？」

セリフが決まっているかのようなこのやり取り。僕はどこか居心地が悪かった。

（あれ…？）

寄せては返す波に、自分を映す。僕は、自分の意志で喋っていない…。なら…。

（僕は…誰なんだ？）

「…ッは！？はぁ…はぁ…。」

まただ…。この夢…。みっちゃんが死んでからよく見る夢…。

「何なんだ…。」

時計を見る。七時十八分…。黒道は、まだ来ていない。もう一度寝る気になれなかった僕は、ベッドから体だけ起こし、机においてある本を開く。

（朝食まで、まだ時間がある…。）

朝食は、八時だったはず…。もう少し待とう。

「………。」

小説は、黒道が置いていったものだった。

（あいつ、こんな本読むのか…。）

題名は、『海原に生きる』。学生を題材にした、ミステリー小説と、恋愛小説が一緒になったようなものだった。

「…悩んだら、海に行け。寄せては返す波が、心を洗ってくれるから。」

「迷ったら、一人になれ。自分だけの空間で、自分の心を叫ぶのだ。」

カーテンを開けながら、黒道がそう言った。

「黒道！」

「おう、来たぞ〜。」

黒道は、この小説のセリフを覚えているのだろうか…？

「いいよな、『海原に生きる』。俺は好きだぜ。これ、ガキの頃から読み続けたんだ。特に好きなの、最後の告白シーンな。」

黒道は、小説の最後のページを指さした。

「…『助手…君を指名しても、いいかな？』ってとこ？これ、告白だったの？」

「そうだぜ。この助手ってとこ、探偵の話じゃないんだ。人生の助手ってことだ。」

そんな話をしていたら、朝食の時間になった。

「ご飯です。食べ終わったら呼んでください。」

そう言って、ご飯を置いていった。

「お、桃だ。」

僕は、桃が好きなのだ。

「いただきま～す。」

「病院の飯って、うまいのか？」

黒道が、そう訪ねてきた。

「うーん…おいしいかな？不味くはないよ。」

僕がそう答えると、黒道は、怪訝な顔をした。

「そうかぁ？病院の飯って、不味いイメージしかないけどなぁ…。」

どれだけ病院のご飯に悪いイメージ持ってるんだよ…。

「そういえば、弟たちは？」

「ああ、友達の家に行くってさ。蓮まで、連れて行っちまった。まったく…あいつらにそんな関係のやつがいたとはな…。」

そうつぶやく黒道は、どこか嬉しそうだった。

「黒道…いいのか？その、僕でさ。」

急に話題を変えられたことに驚いたのか、黒道は僕をじっと見る。

「当たり前。逆に、嵐じゃないと嫌だ。」

「…そっか。」

黒道は、本気だった。あまり知らない僕のことを本気で好きだと言ってくれた。

「ふふっ…馬鹿だなぁ。」

「えっ…なんて！？」

「なんでも？」

意地悪くそう返した僕の頭を黒道が軽く叩いた。

「痛っ。黒道、暴力反対だぞ。」

「ごめんごめん。でも、原因は俺じゃないな。」

少しムッとしている僕の頭を黒道は乱暴に撫でてくる。

「…ちょっと、食わせてよ。腹減ってるから。」

「お、わりぃ。ゆっくり食え。少し散歩してくる。」

黒道はそう言い、病室を出ていった。ぽつんと一人残された僕は、黙々とご飯を食べるしかなかった。もともと、ご飯を食べるために一人になったのだが…。

「………。」

昨日の夢、あれは一体…？

（何かと関係があるのか…？）

桃を食べながら考える。今までは見ることがなかった。でも、みっちゃんが死んだ日の夜からいきなり見るようになってしまった。そして、その夢から目覚める時、必ず頭痛がして、自分が誰だかわからなくなってしまう。

（自分を見失うってことか…？）

「お～嵐。食べ終わったか？」

「う、うん。食べ終わった。」

黒道は食器を持って行ってくれた。そして、帰ってきた時、

「なぁ、嵐。俺、お前を待つ。どれだけ経ってもいい。二ヶ月だろうが、三ヶ月だろうが、お前を待ってる。俺はお前が、好きだから。」

と、言った。僕は、黒道にこう返した。おそらく、明日も来てくれるだろう黒道に。

「うん。必ず、帰ってくる。」

黒道は、それを聞いて、満足したように笑い、病室から出て行った。

（明日も…来るかな？）

その背中を見つめながら、僕はそう思った。

三ヶ月後…。治療期間が終わり、足の骨が治った僕は、主治医に診てもらうことにした。

「…うん、うん。だいぶ回復してるね。予定よりも早い退院なりそうだ。」

主治医はそういった。

「てことは…、もう退院できるんですか？」

「まだ。リハビリがあるだろ？」

黒道はそう言い、主治医の方を見た。

「リハビリはどうなるんだ？」

「はい。二、三週間ほどリハビリを続ければ、歩けるようになるでしょう。」

その答えに、黒道は喜んだ。

「やったな嵐！もう少しだぞ！」

大げさだなぁ…と、思いながら笑う。

「リハビリ、よろしくお願いします。」

「はい。頑張りましょう。」

それから、二週間後、僕は退院した。荷物は黒道が持っていってくれた。僕は、家までの帰り道を一人で歩いていた。

ブー…ブー…

「……？」

メールだ。画面を見ると、

『上を見てくれ。』

と、書いてあった。上を見ると、

「……！！」

そこには、虹が広がっていた。大きく、七色の虹。それはまるで、僕の退院を祝ってくれているようだった。

「きれい…すげえきれいだ…。」

写真を取り、家に帰ると、

「嵐！退院おめでとう！！」

と、大勢の人に言われた。

（！？青木…九条、黒道…あとは誰ッ！？）

「俺の友達だ。嵐のことは知ってる。俺が説明した。そしたら皆、祝ってくれるってさ。」

「おめでと〜！三ヶ月、お疲れ様〜！」

まぁ、何か知らないけど…。

「ありがと〜！」

僕がそう言うと、黒道は僕にジュースを渡してきた。

「な、乾杯しようぜ。」

しょうがないなぁ…。

「いくぞ〜！せーのッ。」

『かんぱーい！！』

皆、心から祝い、楽しんでいるみたいだ。焼肉を食べたり、会話したり、ジュースの一気飲み対決をしたりと…。僕の家から、笑い声が溢れてくる。これが、『楽しい』ということなのかな？きっと、そうなのだろう…。

「楽しいか？」

黒道が聞く。僕はうなずき、黒道の手を引き、ベランダに連れて行った。

「なぁ、僕はさ、みっちゃんが死んでから、心から楽しいって思ったことがないんだ。」

「…そうか。」

「でも、黒道と出会って変わった。僕は今、心から楽しんでいるよ。」

僕がそう言うと、黒道は笑いながら言った。

「そうか…。今、楽しいのか。良かったな。楽しんでもらえて何よりだ。」

「ねえ黒道。僕、夢を見るんだ。みっちゃんと、海にいる夢。最初、戸惑った。自分がわからなかったし、現実との区別がつかなかったから。でも、もう僕は気づいたんだ。」

そう、あの海。あの海は、僕とみっちゃんの…。

「あの海は、みっちゃんと最後に行った場所だったんだ。あの次の日に、みっちゃんは死んだんだ。」

「…心残りが、夢に出たんだろうな…。」

黒道が、ぽつりとそう言った。

「うん、そうだと思う。」

僕は、みっちゃんのことを忘れられなかった。だから、そんな夢を見てしまうのだろう。

「ねぇ…。」

「ん？どうした？」

宴の騒がしさを背に、僕は言った。

「お願いがあるんだけどさ…。」

翌日、僕は黒道と電車に乗り、ある場所に行った。時間は、わざと日暮れ頃を指定した。

「…なぁ、本当にここであってるのか？」

「………うん。」

電車から降り、山に向かう。もう周りは暗い。

「ここはさ、登山者に愛されてる観光名所。でも、僕とみっちゃんしか知らない場所があるんだ。みっちゃんが見つけてくれたんだ。そこで、告白された。僕にとっては、思い出の場所なんだ。」

みっちゃんのことを思い出しながら、山道登り続ける。そして、本来のルートから外れた道を突き進む。そこには…。

「…えっ。嘘だろ？」

「なんで僕が、夜に行くことを選んだと思う？」

そこには、小さな平原が広がっていた。そこには、星屑のような光が飛び交っていた。

「ホタルを…見るためか？」

「うん。きれいでしょ？」

僕はそう言い、あるものを探した。

「あ…。」

それを見つけた黒道は、黙ってしまった。

「みっちゃんの墓。僕はここにした。みっちゃんとの思い出の場所に、僕達だけの秘密の場所に、お墓を作ったんだ。」

「俺に教えて、良かったのか？」

「…うん。黒道は、僕にとって大切な人だから、いい。」

僕は、一ヶ月に数回、ここに来ていた。その度に学校のこと、友達のこと、そして、みっちゃんとの思い出を語っている。

「みっちゃん、この人は、黒道。風堂黒道。僕の…。」

僕はそこで間を開け、こう言った。

「僕の…恋人。みっちゃん、黒道はね、乱暴で、荒くて、周りから敬遠されてるけど、本当の姿は、優しくて、弟思いの人。」

「………。」

黒道は黙っている。何を思っているのだろう。

「黒道は、僕のことを好きだと言ってくれた。でも、僕は怖いんだ。みっちゃんみたいに、死んでしまわないか、怖い。」

「みっちゃん…だっけ？安心しなよ。俺は、絶対に死なねぇから。そして、この弱っちくて、頼りない嵐を、絶対に守ってみせるから。」

黒道は、力強くそう言った。その時、奇跡が起きた。

「ありがとう、嵐。」

「…！？みっちゃん！？」

みっちゃんの声が聞こえた気がした。

「黒道！聞こえた？今の…。」

「え？何が？」

黒道には、聞こえなかったみたいだ。でも、僕は確かに聞こえたのだ。みっちゃんの声が。

「あ、あれ？おかしいな…。」

涙が溢れてくる。止まらない…。

「嵐…？どうしたんだ？」

黒道はそう言った。優しくて、温かい声…。

（今のは、気のせいか、それとも…。）

神の悪戯だろうか。でも、みっちゃんの声が聞けた。もう二度と触れることさえできないみっちゃんの声を。それだけでも、嬉しかった。

「さ、帰ろう。もう真っ暗だぜ。」

「…うん。」

帰り道、僕はみっちゃんの墓に振り返った。

（みっちゃん、ありがとう。）

「おーい、嵐。行くぞ。」

「うん。今行く。」

I will never forget you.

その意味は、あなたを決して忘れない。僕は、これからもみっちゃんを忘れないだろう。ずっと、ずっと。必ず、忘れない。

「…嵐。」

「…何？」

「大好きだぜ。」

「……僕も。」

少し照れながら、僕はそう返す。

（…また、来よう。）

何度でも、何度でも、黒道とここに来よう。みっちゃんに会いに、また行こう。

「…何か、嬉しそうだな。」

「まぁね。」

電車の中で、黒道はそう言う。もう、今までの僕じゃない。僕は、大切なもの、本当に大切なものに気づくことができたのだ。もう、僕は失わない。これからも、黒道と歩んでいこう。自分の道を、一歩一歩、確実に。

「ほら、着いたぜ。」

「うん、降りよう。」

電車のドアが開く。僕の、いや、僕らの物語は、まだ始まったばかり。これから、僕が自分を記すのだ。

二年後、卒業式の日。

「黒道、行こうか。」

「おう、いよいよ卒業式だな。」

（もう卒業か…。みっちゃんの声が聞こえたのが昨日のようだ…。）

式は進み、卒業生代表のスピーチになった。

「卒業生代表、風堂黒道。」

「はい。」

黒道が立ち、スピーチ台に向かう。

（黒道…しっかりしろよ。）

「卒業生代表の風堂黒道です。この三年間、色々なことがありました。喧嘩もありましたし、楽しい事もたくさんありました。何よりも印象に残ったのは、一年生の時です。僕は、四人兄弟の長男です。だから、弟達の世話をしなくてはいけないので、あまり学校に来ることはできませんでした。体も大きく、言葉も荒く、親がいない僕は、同級生に避けられていました。そんな僕に話しかけてくれたのが、山原嵐でした。僕のことを怖がらず、関わってくれました。僕は、戸惑いましたが、次第に積極的に関われるようになりました。」

黒道と出会ったときを思い出す。僕も、戸惑ったしそこそこ怖かった。でも、本当の姿を知ることができて、嬉しかった。

「その後、嵐は怪我をして、入院しました。僕はお見舞いに行ったり、本を届けたりして、嵐が退屈しないようにしました。」

余計なお世話だよ…と思いながら、僕に集まる視線から目をそらした。

「退院した日、僕は学校の友達や僕の友達を呼び、皆で嵐を祝いました。僕は、嵐にベランダに連れて行かれ、二人で話しました。そのときに、嵐は、僕にとあるお願いをしました。それは、大切な人のお墓参りについてきてほしいというお願いでした。」

僕は、あの場所のことを思い出した。ホタルが飛び交う、あの場所を。みっちゃんの声を聞いた、あの場所を…。

「翌日、僕は夜に嵐と墓参りに行きました。なぜ、夜にしたのかはわかりませんでしたが、お墓のある場所についた時、その理由がわかりました。星屑のようなホタルが、飛び交っていたんです。僕は、その景色に見とれてしまい、言葉を失いました。でも、嵐はその先に行きました。少し進むと、お墓がありました。大切な人のものです。僕が、嵐を見ると、泣いていました。本当に大切なものを失うということは、心に穴が空くような気持ちです。耐え難いものですが、嵐は耐えました。嵐は、強くて、優しいです。そんな同級生が居ることが、僕の誇りです。その後、電車に乗った時、嵐はどこか嬉しそうでした。そして、何かを強く心に決めたようでした。それを見て僕は、嵐の中で何かが変わったことを確信しました。僕は嵐と同じ高校を選びました。これからも嵐や、他の同級生とか変わっていこうと思います。そして、同級生の皆を大切にして、これからの長い人生を送っていこうと思います。以上です。」

拍手が鳴り止まなかった。

（ありがとう…黒道。）

黒道には、感謝しかない。今まで、僕と関わってくれて、ありがとう。

「嵐、ありがとな。」

通りすがりに、黒道はそう呟いた。

「うん、こちらこそ。」

卒業式が終わり、黒道と帰っていると、黒道がこう言った。

「みっちゃんは、いつでもお前の中にいる。お前が忘れなければ、みっちゃんがずっと生きているんだ。知ってるか？人は二度死ぬんだ。肉体と、記憶。忘れなければ、そいつは生きているんだ。だから、忘れないでくれ。」

「…うん、わかった。ありがとう。でも、僕、誓ったんだ。あの日の夜。みっちゃんを永遠に忘れないって。だから、忘れないよ。」

そう、あの夜、誓ったんだ。みっちゃんに。

「ほら、行くぞ。」

「うん、行こう。」

僕達は、みっちゃんを永遠に忘れない。そう誓ったのだから…。